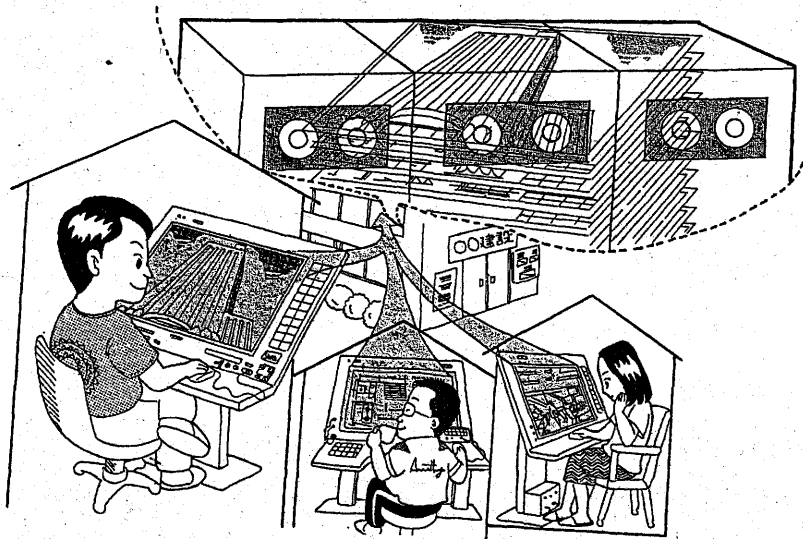


カジュアルな服装で在宅勤務



進んだ公的機関の情報公開

32 最近、国の機関ばかりでなく地方の官公庁でも多くの情報をコンピュータネットワークを通じて提供してくれるので、自治体の進めている今後の街づくりの構想や公共事業の発注予定を知ることができる。実際に発注された事業については、公共事業データベースを呼び出せば、他社が受注した工事でも設計図などの必要な契約図書を全て見ることができ、企画調整部門は、今後の事業計画の策定などに役立っている。公募前の事業についての情報は、公開情報だけではわからないこともあり、広報担当にテレビ電話をかけて問い合わせたり、有望そうな事業に関しては実際に足を運んで、事業の担当者の説明を受けることも少なくない。

33 来月の初めに××市の下水処理場拡張工事が公募になる予定である。在宅勤務やテレワークが普及していく中で、自宅の端末機器が能力不足であったり、自宅が手狭で仕事ができない人のために、各地にテレワークセンターが建設されているが、××市はこれを中心に急激に成長してきた地区である。以前に、この市が行った道路整備で縄文時代の遺跡が出て苦労したことを聞いたことがある。事業計画書が公表されたので、××市にアクセスして計画書を読んでみたが、この地区は特段の心配はないようだ。

在宅勤務をしている部下に電子メールを送り、その他に問題点がないか検討し、今週中に結果を報告するように指示した。ベテランの彼なら必要ならば現地調査も行い確認するだろうから、このような検討を任せるには適任である。

34 下水処理場の規模や工事の期限などの詳細な情報はまだわからないが、是非とも受注したい仕事であるので、公募後すぐに応募できるように、技術設計部に向向いて準備作業の依頼を行った。また、受注できた場合の体制づくりのために、工事用機械の手配と必要ならば調整を行うことを部下に指示するとともに、建設会社データベースによって、この種の仕事に強い会社の選定作業に取りかかった。来週中には各社の担当者を集まってもらって交渉に入りたいと思う。

顔合わせもやはり必要

35 自分の部下の中には、相手とはテレビ電話の画面で顔を合わせたことがあるだけで、実際には1度も本当の顔合わせをすることなく、仕事を進めている者がいる。自分の世代は、1度は顔合わせするとか、大事なことは足を運んで説明するということが大切と考えているが、若い世代は通信で済むことは通信で済ませることを合理的と考えているようである。今年入社した社員が自分の年齢になるころには、このような調整作業も全て通信で処理するようになるのかもしれないが、足を運ぶことを評価する人がいる現状では、まだじかに対面して話をするのもむだではないと思う。

36 今週は××市の下水処理場拡張工事に専念したいのだが、明日は本社の専務の工事現場視察に同行する予定が入っている。秘書課にアクセスして明日の行程を確認した後、車中で専務に尋ねられたときの準備として、視察先の工事の勉強をしておくことにした。携帯端末からいろいろな情報を引き出せるので、自分が入社したときのように抱いっぱいの資料を持っていく必要はないが、専務の見たい情報をすぐに提供できるように、アクセス先の確認も含めて下調べだけはしておくことにした。明日1日オフィス留守にすることもあり、他のチームや部下からの打合せの要求を調整した後、自分の予定を登録して今日の仕事を終えることにした。

災害時には情報が頼り

37 帰り支度をして、端末のスイッチを切ろうとしたそのとき、ディスプレイに「緊急」の赤い文字が点滅を始めた。社内ネットワークで配信される情報の中でも、特に重要な情報が入ったことを示す合図だ。電子メールによると、△△国で大きな地震が

発生し、建物の倒壊などでかなりの被害が出ているらしい。被災地には、自分の会社の支社もあり確か同期入社の方が駐在していたはずだ。とりあえず安否を確認する電子メールを入れることにした。

38 30分ほどすると、彼からの電子メールが届いていた。地震はちょうど出勤直前に発生したとのことで、支社の被害状況はわからないものの、彼の家族も自宅も無事とのことであった。ライフラインにも被害が出て電話は混み合っているようであるが、一部切れた有線系の通信ルートのほかに、衛星などを用いた無線系の通信ルートが確保されているので、文字情報の交換のための電子メールは問題なく動いているようである。そのため、被害の状況は刻々と伝わってくるし、少なくとも支社の日本人社員及び現地人社員については無事を確認したとのことである。日本も災害国であり、いつこのような天災が発生するかわからない。災害時には正確な情報が頼りであり、情報ルートの多重化は今や常識になっている。今回の地震もその重要性を証明することとなった。今回の震災では、携帯電話を持っていた人については、電話から発信される電波をたどって救出活動を進めているようである。登山のときの発信器の携帯など、位置の特定には移動通信機器が大変に役に立っている。

バーチャル技術のこんな使い方

39 帰宅すると、家のリフォームのために設計会社に依頼しておいた我が家の映像モデルが電送されてきており、通江さんがお義父さんと一緒に、家の中の様子を調べていた。建材メーカーのカタログから選んで、模型の床や壁を変えるとそれに応じた材料費と工賃が算出されて、おおよその改築費用を知ることができる。

40 家の改築はお義父さんのためであるが、通江さんはこれを機会にキッチンのシステムも一新したがついている。とりあえず、今度の休みにでも住宅設備展示場に出かけてみようと思う。展示場では、映像モデル情報を持って行けば、実際のスケールを感じることができる本格的な疑似体験を味わうことができる。また、バーチャルでは表現しきれない、材料の色彩や手触りなどをサンプルで確認することも目的である。

41 今日は、報介の英語の勉強の日で、我が家ではこの日を「報介の国際コミュニケーションの日」と呼んでいる。世の中には自動通訳機が普及しており、単に要件を伝えるビジネスの世界では十分に役立っている。しかし、外国人と本当に心から付き合うためには、通訳機を介さない、感情を込めたコミュニケーションが必要である。報介がイギリスに住むマイケルを呼び出す。今日は、報介が英語を話す番でマイケルが

報介のおかしなところを直してくれる。まだ自動通訳機のお世話になることが多いが、やはり子供はのみ込みが早いようで、始めた頃に比べると格段の進歩である。発音について言えば自分より上手かもしれない。自分が子供の頃は、手紙を書いて英語の勉強をするペンパルを持っている友達がいたが、今ではネットパルになっている。あさっては、マイケルが日本語の勉強をする番だ。

42 お義父さんはまだ模型と格闘していたが、明日の朝は出張で早いので、自分の端末への電子メールを読んだ後、釣り仲間で作っている電子会議室のページをのぞいてから寝ることにした。電子会議室は、釣りサークルの連絡や釣果報告が主な役割となっているが、仲間以外にも公開しているので、知らない人の参加もたまにある。少し前から参加しているカナダ人のスティーブが、釣り上げたキングサーモンをつかんでニコニコしている写真と共に報告を載せていた。初めてスティーブの顔を見たが、想像していたよりずっと若いのが意外であった。スティーブが前から鮎の友釣のことに興味を持っているようなので、今度の鮎釣りではビデオ撮影して、電子メールで送ってやろうと思う。バーチャルフィッシングでの練習の成果を試すのが楽しみだ。

43 田舎の母の誕生日が近い。テレビ電話をかけるといつも、そんなに遠いところに住んでいるわけではないので、たまには顔を見せろと言われる。もう夜遅いこともあり、テレビ電話をかけるのはやめにして、プレゼントのことにして画像音声メッセージを電子メールで送っておいた。

・・・1か月後・・・

高速道路もスイスイ

44 報介の夏休みが始まった。今日から通江さんが計画した家族旅行だ。仕事の進め方が効率的になったせいか、休暇も取りやすくなり、我々のような共働きの家族でも長期の旅行が可能となった。これも、情報通信の高度化の恩恵の一つかもしれない。お義父さんが車椅子を使うようになってから初めての旅行である。電車やバスの中で車椅子を見かけることは珍しくなくなったが、今回はお義父さんの体調も気になるので、車椅子を積み込めるレンタカーを使うことにした。

45 出発するとすぐに、報介が端末から観光情報を引き出してはお義父さんに説明しはじめた。お義父さんは、最初のころは黙って聞いていたが、途中から立場が逆になり自分があらかじめ立ておいた計画を話し始めたようである。今回の旅行に備えて

2人とも結構準備していたのだろう。高速道路に入った。通江さんと知り合って2人でドライブをしていたころには、有料道路の出入口が渋滞の一因となっていたものがあるが、情報通信技術を利用したノンストップ自動料金収受システムとなってからはそんなこともなくなったし、休暇を計画的に取れるようになったせいか、特定の時期にやたらと旅行者が集中することもなくなって、事故でもないかぎりひどい渋滞は珍しくなった。

馬場商店のある日

オンラインで商売繁盛

46 朝食を終えて、早速仕事に取りかかる。オンライン情報にのせる「今日の野菜」などをカメラで撮った。最近、スーパーなどの大規模店に対抗するための策として「バーチャルスーパー」を設立したところである。地域の八百屋、魚屋、米屋、酒屋などが参加し、地域情報室を通じてオンライン情報を流しているのだが、実際のお店の場所は離れているにもかかわらず、お客は画面上ではあたかも一つのスーパーで買物をしているような気持ちになるはずである。お客は、仮想店内を進んでいろいろな写真を見て品物を選び、ジャガイモを幾つ、牛肉何グラムというようにキー操作か音声入力で注文する。この他にも各商店は、従来からやっている、テレビ電話による直接注文も受け付けている。

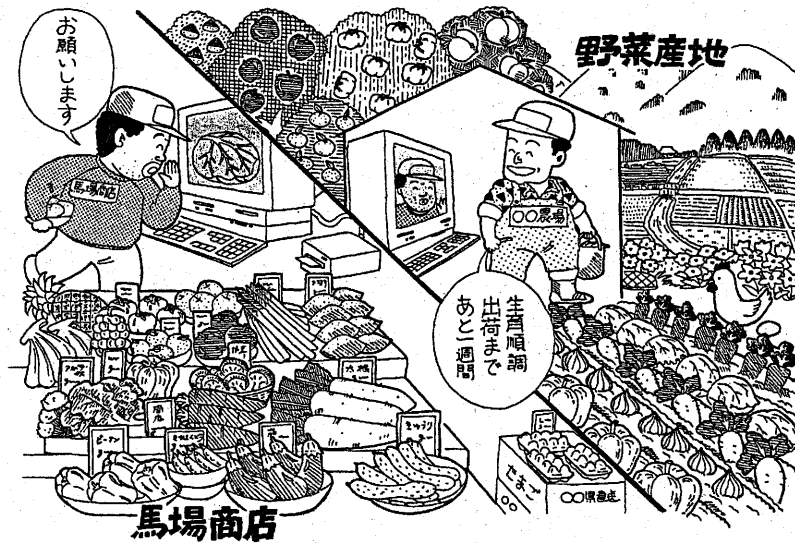
47 そうこうしているうちに、近所に住むおばあちゃんの上野さんが買物にきた。上野さんのような世代の家庭では、生鮮食料品は、実物を見て買物するのが安心できるようで、実際に近くの八百屋や魚屋に行って、店員と話をしながら買物するのが楽しみなのである。しかも、今日はなんとあんなに嫌がっていた電子貨幣で支払うという。「面倒そうだったけども案外簡単でしょう、本人しか使えないから盗む人もいないし、みんな電子貨幣を使ってくれるようになれば店に現金をあまり置かなくてよくなるんだけどね、おばあちゃん宣伝してくださいよ」なんて世間話をしているとどんどん時間がたってしまった。

48 八百屋という商売は朝が早い。高度情報通信社会になっても、仕入れがあるので以前と同じように、朝早くから中央市場に行かなければならないのだ。でも、もちろん情報化が進んできたことから、近隣の数戸の農家と直接に契約を結んでいる作物もある。何度か実際に会って信頼関係ができれば、あとはテレビ電話などで野菜の出来具合を見ながら直接注文したり、映像情報を添付した電子メールをやりとりしながら契約できる。

馬場商店業務拡張計画

49 ゆっくりしてはられない。そろそろ宅配に行く時間だ。買物すること自体が大変だという、上野さんよりももっと高齢の家庭が主なお客さんである。配達料を入れてもスーパーの宅配を頼んだ方が安いという人もいるが、スーパーなどのオンライ

新鮮野菜は産地直送で



ンショッピングは、単に機械相手に打ち込むので無機質な感じがするのに比べ、自分の店の場合、テレビ電話をかけて顔を見ながら頼めるので楽し、暇なときは話もできて楽しいとのことである。宅配もスーパーに較べると若干高いのだが、その代わり配達頻度が多いとか、配達ときに旬の野菜をサービスしたり、調理法の紹介するなど小回りのきくサービスを行うように努めているつもりである。情報化の進展で、トラック1台当たりの積載率の向上や共同配送の普及など、物流全体でみるとずいぶん合理化が進んでおり、洗剤や下着などの日常生活用品や保存のきく食品については、かなり配送が効率化されている。しかし、野菜や魚など生鮮食料品の場合は、各戸ごとの1回の配達量が少なく保存もきかないことから、合理化された物流システムに完全にのせるのは難しい。バーチャルスーパーに参加している商店の間で、配達区域の分担をすることである程度の合理化を進めているが、商店が直接に配達しなければならないという点についてはあまり変わっていない。

50 お客の顔が見えないスーパーの宅配では、マニュアルどおりの品質管理をしているようだが、自分の扱う品物は品質といい新しさといい、絶対にスーパーには負けていない。オンラインの画像では、野菜などの品質がはっきりわからないというが、そ

こがまさに自分が築いてきた店の信用である。そのおかげで最近、在宅勤務を始めた中野さんのような家庭でもお得意さんになってくれるようになった。規制緩和の流れとともに競争が激しくなっていく中で、友人の中には代々続けてきた店をたたまざるを得なかった者もいる。地域の小売店は、地域店なりのサービス努力を行うことで厳しい競争に生き残っていくのだろうと思う。

51 しかし一方で、地域に古くから住んでいる人だけを相手にした商売では、いつかは行き詰まるときが来ると思わなければならない。最近の若い人達は、買物の時間がないらしく、スーパーなどの大規模店を通じてオンラインで買物をし宅配を頼むか、週に1度休日に車でまとめ買いをしているようだ。ただ計画的にまとめ買いをしているつもりでも、どうしても不足がでてきた場合などは、自分の経営する八百屋など地域店に頼んでくるのが実情だ。大量仕入れのスーパーには、価格の点ではどうしてもかなわない。このような傾向を打破すべく「バーチャルスーパー」を設立したのだが、まだできたばかりで広告を見てもそれほど洗練されていない。スーパーに対抗するには、まだまだ工夫が必要だと思う。

52 最近では、本当に様々な商品がオンラインショッピングで買えるようになっている。EDIのおかげで、流通の仕組みも品物の配送方法も合理化されたが、末端部分では結局は商品を各戸に配送しなければならず、本や衣料などをそれぞれの流通業者が個別に配送するのはいかにも効率が悪。自分は、この地域のことをよく知っているし、何曜日の何時頃であれば相手が在宅しているか大体わかっており、野菜の配達と組み合わせれば、地域の流通拠点になれるのではないかと考えている。バーチャルスーパーの成り行きを見た上で、この方面への業務の多角化についても真剣に考えてみようと思う。

渋滞を避けて空いた道へ

53 バーチャルスーパーを始めてから、以前は注文が来なかった地域からも注文が入るようになった。遠くの配達ときに混雑に巻き込まれてはたまらないので、配達に行く前に道路の状況を調べると大した混雑ではないようだ。車を走らせていると、道路交通情報を受信したモニター画面に道路に沿って赤い線が現れ、渋滞が始まっていることを教えてくれた。どうもこの先で故障車が道路をふさいでいるらしい。少し遠回りになるがナビゲータシステムに従って迂回道路に入ることにする。無事に配達を終えて帰ると、もう夕食前のかきいれどきになっていた。渋滞に巻き込まれていたら、